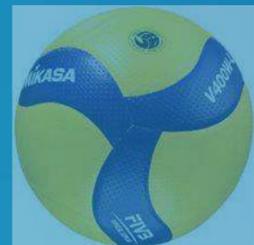


日本バレーボール学会 第27回大会
JSVR 27th Scientific Congress for Volleyball 2022

バレーボールの一貫指導実現のための 階層構造の検討

Discussion of the hierarchical structure for the
realization of consistent volleyball coaching



発表者 杉山 哲平 | 札幌市立柏丘中学校
三村 泰成 | 鶴岡工業高等専門学校
渡辺 寿規 | 滋賀県立総合病院

意思決定に必要な
個人の判断基準

【バレーボールの階層構造】

ゲーム遂行の
目標,意図,意志
チームの基準

プレー指針 (プレーガイドライン)

ゲームモデル

バレーボールの標準

バレーボールの原理

バレーボールのルール

自然の法則、摂理

現段階で最低限
満たしてほしい
スキルや知識
(最低限の基準)

個人やチーム
によらない
普遍的なもの

矢印の意味

頻度 大

頻度 小

CHAPTER1

背景

1. 日本男子バレーのアップデート
2. アンダーカテゴリ指導との乖離

CHAPTER2

目的と仮説

1. 階層化構造と一貫指導の実現
2. 仮説

CHAPTER3

考察

1. 階層化構造の必要性
2. プレー指針・ゲームモデル
3. 基礎基本を考える

CHAPTER4

結論・まとめ

1. 階層化構造におけるポイント
2. 階層化構造によって期待される取組
- 3 おわりに

CHAPTER 1

背景 (1)

～日本男子バレーボールのアップデート

近年、日本のバレーボールにおける男子のトップカテゴリでは、チームの育成・強化の過程において、少しずつ「**ゲームモデル**」や「**プレー指針**」にアップデートが見られる。

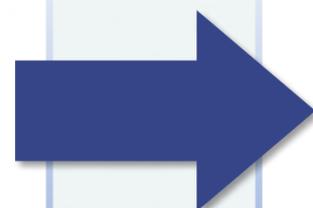
- ▶ 代表チームやVリーグで外国人指導者の採用
- ▶ 世界トップレベルの外国人選手の加入
- ▶ 国外プロリーグで活躍する日本人選手の増加

日本の男子バレーボールで何が起きているのか？



2016リオデジャネイロ五輪

最終予選で敗退
2008年北京五輪を除き、1996年アトランタ五輪以来、5大会の五輪出場を逃す



2020 Olympic (7位)

2020東京オリンピック
1992バルセロナオリンピック以来となる
29年ぶりの快挙

CHAPTER1

背景（1） ～日本男子バレーボールのアップデート

世界のゲームやプレーに関する考え方、つまり戦術や技術に関する情報や知識が、日本の中にも浸透していくことになった過程に、日本で初めての外国人監督として**ゲーリー・サトウ氏**の就任した際に発信された情報にも手がかりがある。

- **基本的な技術指導法の改革**
- **改革を実践していた日本代表選手**
- **代表に対する強化本部の評価**

インタビュー記事やコラムから当時を振り返る

スマートバレーと変貌の兆し

サトウ監督は、「スマートバレー」を掲げ、頭を使うバレー、簡単に失点しないバレーを目指しているという。¹⁾

スピードのあるトスに合わせて動きを小さくするのではなく、十分に助走を取り、クイックも大きなスイングで打つ。サーブレシーブは最初に足から動かして正面で受けるのではなく、無駄な動きは極力抑えて手の位置をボールに合わせる。単純な作業のように思えるが、高校や大学、もっとさかのぼれば小学校の頃から「当たり前」として習ってきたことに反することは多く、戸惑う選手も少なくなかった。³⁾

サトウ監督が示してきたものは、**すべて世界では「当たり前」の知識であり、決して特別なことではない。**しかし海外リーグでプレーする選手もほとんどいない、国際試合も限られた数しかない日本選手には、その「当たり前」を知る機会がない。³⁾



photo by FIVB

ゲーリーが日本に伝えなかった世界の当たり前

「僕らは今、バレーをやり始めたばかりの中学一年生と同じなんです。いや、中学一年生なら白紙から吸収できるけど、**僕らは20年間やってきたバレーを捨てて新しいことに取り組まなければならない**。本当にそれでいいのか。その葛藤は今もあります。でも、やらなければならない。**今はたぶん、結果にこだわりすぎる時期ではないと思う**。選手だからもちろん結果はほしいけど、それによってゲーリーの方針がぶれる方がよくない」¹⁾

「新しい考え方を注入してくれると期待している。実際に、**練習はとても自主性に任されている**。そういう意味で、**“やらされてきた”選手にとってはつらいかもしれない**。でもそこを乗り越えないと」と語る。²⁾

グラチャンを5戦全敗で終えた後、米山裕太はこう言った。

「世界の本当のトップ選手が打つジャンプサーブを体の正面で受けて、尻もちをついたり、倒れてしまったら、その分攻撃枚数が減る。そうならないように、**セッターに返らなくてもいいからとにかく上に上げる**。すぐ次の動きに備える。**ゲーリーが言ってきた“世界”はコレか、と初めて実感しました**」³⁾

グラチャンの直後に開幕したVプレミアリーグでも、多くの選手が**サーブレシーブは無理にセッターへ返そうとせず、真上に上げ、そこから攻撃を展開する**。チャンスボールも高く**フワッと返し**、その間に攻撃陣が態勢を整え、複数の攻撃を同時に仕掛ける。かつての「当たり前」から、**今の世界の「当たり前」**へ。監督交代は、わずかながらも確実に、変貌への兆しが見え始めた矢先のことだった。³⁾

ヘッドコーチへの異論 そして日本と世界の大きな差

例えば練習のやり方について、大きなギャップがあった。

サトウ監督のもとでは、**基本的にボール練習は午前中の約2時間半だけで、午後はウエイトトレーニングのみ。**

それに対し荒木田本部長は、「日本人はやはり、練習して練習して**一つ一つの技術をしっかりとしたものにし**、そこから得る自信がベースとなっていくもの。1日2時間半の練習という体制の中で、**日本の選手がしっかりと自分のこと、チームのことを考え、技術的にも何をすべきか判断してやれるか**といったら、**難しいんじゃないか**」と異を唱える。⁴⁾

CHAPTER1

背景（1） ～日本男子バレーボールのアップデート

オリンピックの活躍から分析できるように、**戦術や技術**に関する**情報や知識、概念の浸透**によって、日本の男子バレーボールは、世界の男子バレーボールと戦えるところまでアップデートされている。

- **レセプションで潰されない**
- **組織的ブロックとトータルディフェンス**
- **常に攻撃枚数を確保する**
- **ファーストタッチを高く**
ゆったりアタックライン付近に返球する など

**トップカテゴリーで活躍していた
古賀 幸一郎氏も形に拘らないプレーに言及している**

正しい形でやることは求められていない

全体練習を見学した古賀さんはこの日、そこで気づいた点を踏まえてレシーブの基礎技術などを指導。「**身体はどこを使ってもボールが上がればいいよ**」や「**腕をリラックスした状態で面を作るように**」とアドバイスすると、**形にこだわる傾向があった選手たちの考えにも変化**。従来のやり方にとらわれず練習に励む姿が見られ、表情には新しい発見をした喜びが見えた。⁵⁾

古賀さんは「(バレーは) フィギュアスケートやボクシングといった採点競技のように、正しい形でやることは求められていない。**いろんなやり方がある中で正解はないということ伝えて、遊び感覚でどんどん挑戦してもらったうれしい**」と話していた。⁵⁾

[日刊スポーツ 2021年4月9日]
元バレー代表古賀幸一郎さん、
NECの選手を指導
「どんどん挑戦して」

より 引用

[日刊スポーツ 2021年4月9日]
<https://www.nikkansports.com/sports/news/202104090001181.html>

CHAPTER1

背景 (2)

～アンダーカテゴリ指導との乖離

アンダーカテゴリでなされている旧来の指導があくまで「**基本**」で、トップで行われている現在の指導を「**応用**」と捉えている指導者が多い。

⇒レセプション（サーブレシーブ）、オーバーハンドパスの指導などが最たる例。

- **カテゴリ間での乖離**
- **独自の指導法や理論の乱立**
- **ルールや動作原理に反している指導**

トップとアンダーカテゴリとの隔たりが**一貫指導を実現できていない要素**なのではないか。

**「基本技術」というものがあるとするならば
「どんな状況でも普遍的に用いる技術」を指しているはず**

現場指導の実態

基本と応用の曖昧さ・一貫性のなさ

〈レセプション〉

落下地点に素早く入って「正面」でとる

腕を振らない

ネット近くのセッター位置に返球

ネットから少し離して高く返球してよい

オーバーハンドでとってよい

身体の横でとってよい

〈オーバーハンドパス〉

手首のスナップを使う

キャッチ&リリースの速度を上げていく

目標方向に必ず正対する

パスの方向転換をする

床反力を利用して飛ばす

手をバネにする（になる）

基本？

⇕

応用？

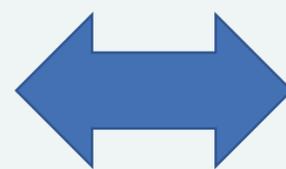
CHAPTER1

背景 (2)

～アンダーカテゴリー指導との乖離

〔サトウ氏の言及以降の男子トップカテゴリ〕

- ・ 基本的な技術指導の見直し
- ・ 戦術と技術がアップデート



〔アンダーカテゴリの指導現場の現状〕

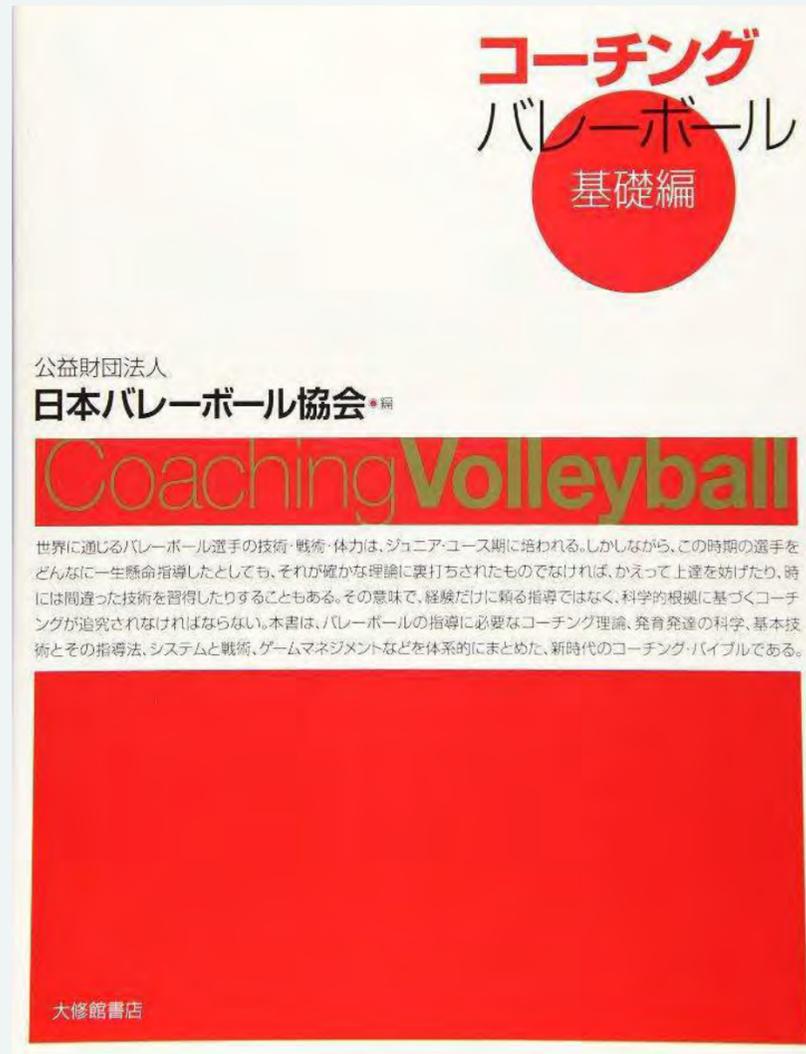
基本的な技術指導のアップデートは進んでいない。

- 一貫性がないのはなぜか？
- 技術検討に系統性があるのか？
- 概念を共有できていないのはなぜか？

バレーボールの指導法をアップデートする目的で
JVA監修の指導教本が出版されているが・・・

REFERENCE

コーチングバレーボール (基礎編)



Updated Textbook

アップデートされた指導教本

- ・ 2014年のバレーボールミーティング
- ・ JVAによる「**基本技術の統一化**」に対する取り組みが紹介
- ・ 『**コーチングバレーボール（基礎編）**』（JVA監修）の新しい指導教本が2017年に出版された。

しかし、「**コーチングバレーボール**」の出版やゲーリーサトウ氏から端を発する今日の日本のバレーボールの指導法のアップデートは、残念ながらまだまだ一般的なものにはなっていない。

特にアンダーカテゴリーでは古くからの指導が受け継がれたままになっている。

CHAPTER1

背景

1. 日本男子バレーのアップデート
2. アンダーカテゴリ指導との乖離

CHAPTER2

目的と仮説

1. 階層化構造と一貫指導の実現
2. 仮説

CHAPTER3

考察

1. 階層化構造の必要性
2. プレー指針・ゲームモデル
3. 基礎基本を考える

CHAPTER4

結論・まとめ

1. 階層化構造におけるポイント
2. 階層化構造によって期待される取組
- 3 おわりに

CHAPTER 2

仮説と目的

～階層構造化と一貫指導の実現

〔近年の日本のバレーボール〕

- ・ チーム戦術やそれを支える技術では、世界の標準の導入が進まなかった。
- ・ 選手自らがバレーボールのゲーム構造や戦術を意識した創造的なプレーを生み出す力に欠けていた。

- 基礎技術の検討
- ゲーム構造の理解
- 戦術を意識したプレー概念

これまで国内バレーボール界では技術検討およびそれに基づく一貫指導プログラムは確立されてこなかった

CHAPTER 2

仮説と目的

～階層化構造と一貫指導の実現

他競技では・・・

ジュニア世代から**段階的に選手を育成する一貫指導**を目指し、**世界を基準**とした様々なアプローチと研究を実践。

日本では近年、サッカーやバスケットボールなどでも取組が始まっている。

- **独自の指導者資格やライセンス制度**
- **育成年代の技術習得におけるガイドライン**
- **初等・中等教育で区切らない年代ごとの育成概念**

基礎技術とは何かということを含味することなしに、ボールゲームの一つひとつの技術や技術要素を、直ちに基礎技術として指導することの問題点を指摘

バスケットボールでの 先行研究 (抜粋①)

複雑系的な思考からみたバスケットボールの練習における戦術と技術との関連性について

谷釜尋徳¹⁾, 藤田将弘²⁾, 芦名悦生³⁾

The relationship between tactics and techniques in basketball practice from the perspective of the complex systems concept

TANIGAMA Hironori, FUJITA Masahiro, ASHINA Etsuo

Summary

This research examines the relationship between tactics and techniques in basketball practice based on the complex systems concept. The results of this examination are as follows.

The idea of reductionism-the basic approach of modern scientific thought-has taken deep root in the fields of sports science. Therefore, in conventional basketball practice, it has been regarded as effective to break down the whole (i.e., the game) into individual technique elements, and individually master the basic techniques as parts.

However, with this practice method, mastery of basic techniques-which is supposed to be a means for achieving success in games-becomes an end in itself, and as a result, a phenomenon occurs whereby discrepancies appear between basic techniques and game tactics.

On the other hand, if the game is considered from the perspective of the complex systems concept, which assumes interrelationships between individual elements, then in basketball practice it is not sufficient to focus individually on basic techniques, and a need arises to learn the interrelationships between techniques.

For the above reason, tactics and techniques should always be regarded as an integral whole in basketball practice. In order to learn tactical action without any divergence between the two, it is not sufficient to practice individual techniques alone. There is also a need to incorporate practice emphasizing the interrelationships between elements.

1. 問題の所在

スポーツにおいて競技力を高めるために、大半の競技者が「練習」を行っている。その意味する

ところは「運動習熟のような学習内容をマスターしていく過程。」¹⁾とされているように、競技力向上の手段として練習が不可欠であることは言うを待たない。しかし、一言に練習といってもその方

1) 東洋大学スポーツ健康科学研究室 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20 Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 28-20, Hukusan 5, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN.
2) 日本体育大学スポーツ局
3) 日本体育大学運動方法(バスケットボール)研究室

技術の研究や指導のため、バスケットボールの技術を一つ一つ県有したり、一つの技術が構成されている要素を分析し追究することは重要である。しかし、**ボールゲームの一つひとつの技術や技術要素を、ただちに基礎技術として指導することは、基礎技術とは何かということを吟味することなしに、個別化したものを基礎であるという単純で機械論的な把握のしかたである。**

(中略) 要素還元主義的な論調になぞらえてみると、**バスケットボールのゲームという「全体」を個別の要素」に分析したものがパス・ドリブル・シュートといった基礎技術として把握されてきたが、その要素を統合する作業をもってしてもバスケットボールの全体像を理解するには至らないといえよう。**

バスケットボールでの 先行研究 (抜粋②)

複雑系的な思考からみたバスケットボールの練習における戦術と技術との関連性について

谷 釜 尋 徳¹⁾, 藤 田 将 弘²⁾, 芦 名 悦 生³⁾

The relationship between tactics and techniques in basketball practice from the perspective of the complex systems concept

TANIGAMA Hironori, FUJITA Masahiro, ASHINA Etsuo

Summary

This research examines the relationship between tactics and techniques in basketball practice based on the complex systems concept. The results of this examination are as follows.

The idea of reductionism—the basic approach of modern scientific thought—has taken deep root in the fields of sports science. Therefore, in conventional basketball practice, it has been regarded as effective to break down the whole (i.e., the game) into individual technique elements, and individually master the basic techniques as parts.

However, with this practice method, mastery of basic techniques—which is supposed to be a means for achieving success in games—becomes an end in itself, and as a result, a phenomenon occurs whereby discrepancies appear between basic techniques and game tactics.

On the other hand, if the game is considered from the perspective of the complex systems concept, which assumes interrelationships between individual elements, then in basketball practice it is not sufficient to focus individually on basic techniques, and a need arises to learn the interrelationships between techniques.

For the above reason, tactics and techniques should always be regarded as an integral whole in basketball practice. In order to learn tactical action without any divergence between the two, it is not sufficient to practice individual techniques alone. There is also a need to incorporate practice emphasizing the interrelationships between elements.

1. 問題の所在

スポーツにおいて競技力を高めるために、大半の競技者が「練習」を行っている。その意味する

ところは「運動習熟のような学習内容をマスターしていく過程。」¹⁾とされているように、競技力向上の手段として練習が不可欠であることは言うを待たない。しかし、一言に練習といってもその方

1) 東洋大学スポーツ健康科学研究室 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 28-20, Hakusan 5, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

2) 日本体育大学スポーツ局

3) 日本体育大学運動方法 (バスケットボール) 研究室

スポーツ運動技術は、突き詰めればゲームで成功を収めるための「手段」であるはずなのに、練習においてその習得自体が目的化してしまえば、それがいかに高水準の運動経過であっても**実際のゲームとは乖離してしまう**のである。

- **要素還元主義的思考に基づいた技術指導の問題点を指摘**
- **技術と戦術が乖離しやすいスポーツ指導現場で行われる練習方法についての警鐘**

他競技で行われている「**技術と戦術の概念規定**」に関する複数の先行研究を参考。バレーボール競技の「**階層化構造**」を明確にすることで、技術や戦術に対して、個人や地域で異なる認識ではなく、どんな状況でも**普遍的に用いる**ことができるようになる。

- **カテゴリをつなげる一貫性ある指導と育成**
- **バレーボール界（日本）における共通概念**
- **普遍性を土台とした発展的、多様性の保障**

・ **階層化構造**を整理し明確にすることで、カテゴリを越えて**一貫して指導すべき基本技術**とはどのようなものを指しているのか？ を考察する。

・ カテゴリ間の指導の食い違いに対する明確な回答を提示することを試み、これまで漠然と考えられてきた、「**基本**」は、**自然法則や摂理と競技ルールに動作原理が積み重なった**、どのカテゴリでも誰にでも当てはまる**普遍的なもの**なはずである。

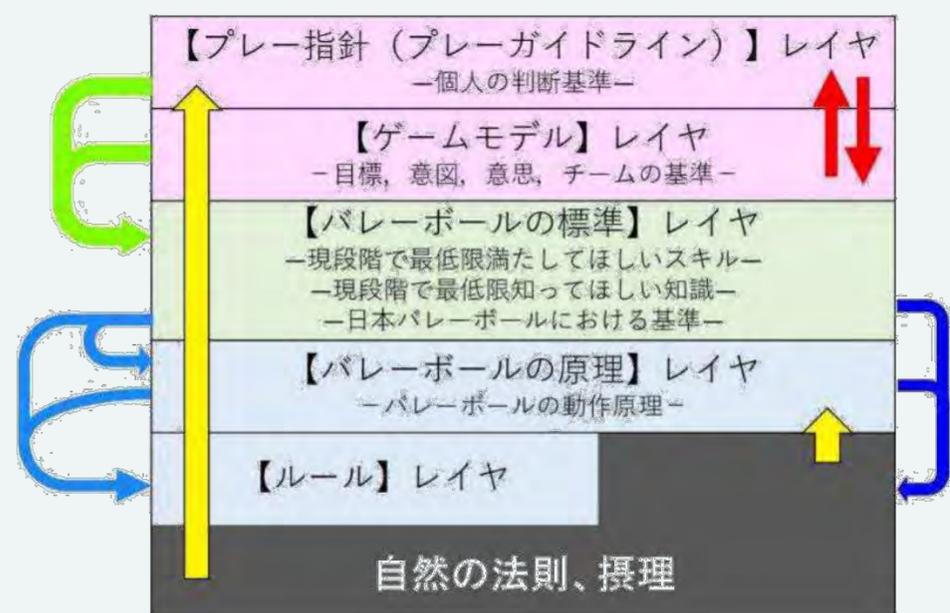
CHAPTER 2

仮説と目的

～階層化構造と一貫指導の実現

【 仮 説 】

競技としてのバレーボールの構造を階層化することで、競技経験と感覚に頼った漠然とした技術論や戦術論、指導論がより明確化し、バレーボール競技に関わるすべての人々、個人・チームの中に探究と協働が保障されていく。その営みを通して、普遍的な合理的概念が構築され、日本でも時代に即した合理的なアップデートと一貫指導の実現に向かうだろう。

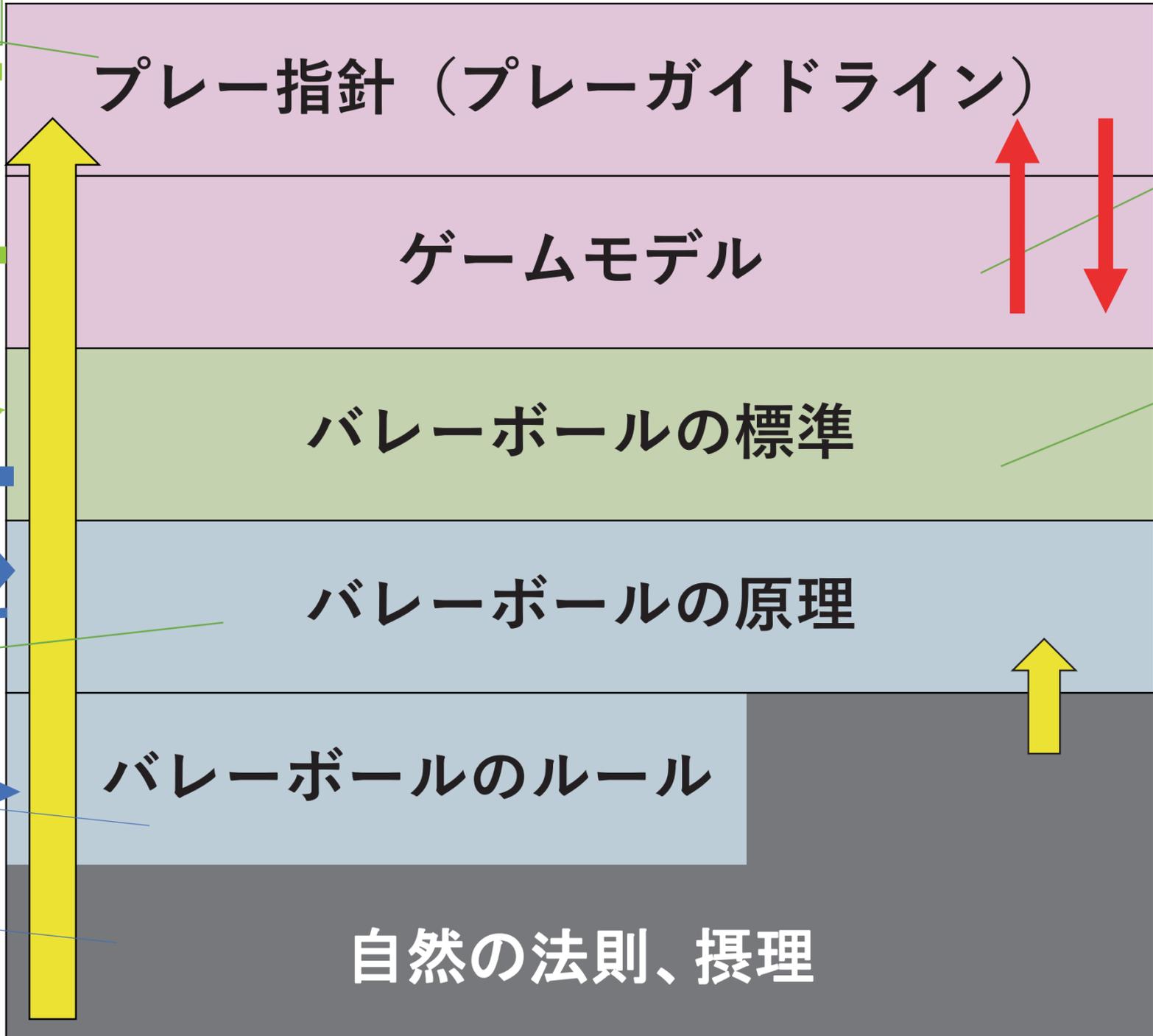


- カテゴリをつなげる一貫性ある指導と育成
- バレーボール界（日本）における共通概念
- 普遍性を土台とした発展的、多様性の保障

意思決定に必要な
個人の判断基準

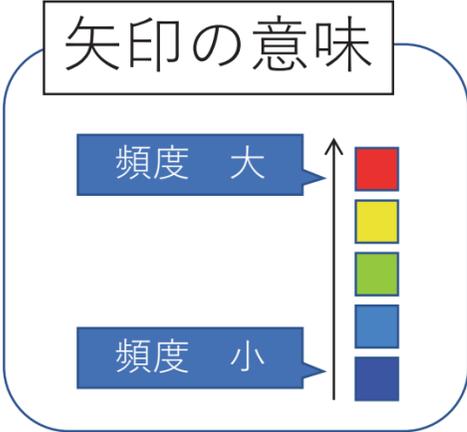
【バレーボールの階層構造】

ゲーム遂行の
目標,意図,意志
チームの基準



現段階で最低限
満たしてほしい
スキルや知識
(最低限の基準)

個人やチーム
によらない
普遍的なもの



CHAPTER1

背景

1. 日本男子バレーのアップデート
2. アンダーカテゴリ指導との乖離

CHAPTER2

目的と仮説

1. 階層化構造と一貫指導の実現
2. 仮説

CHAPTER3

考察

1. 階層化構造の必要性
2. プレー指針・ゲームモデル
3. 基礎基本を考える

CHAPTER4

結論・まとめ

1. 階層化構造におけるポイント
2. 階層化構造によって期待される取組
- 3 おわりに

CHAPTER3

考察 (1)

～競技としてのバレーボールになぜ階層構造が必要なのか？

【従来の日本のバレーボール指導観 (例)】

- 個別のスキルを習得しないとゲームはできないという固定観念
- 「基本」 = 個別スキルの限定的な型 (かたち・動き) を画一的な反復練習に終始
- 限定的な型の再現が練習の目的化 (型にはめる練習)
- パターン再現の集積という認識の練習・ゲーム (試合)

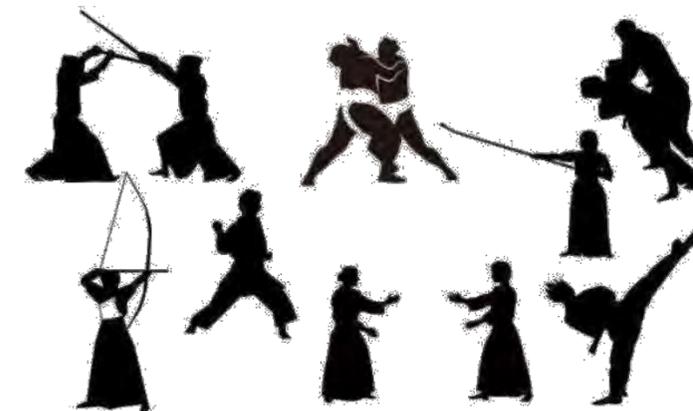
(例) レセプション (サブ レーブ) の指導

✓ 「正面」で必ず取りなさい
(へその前、膝と膝の間) など

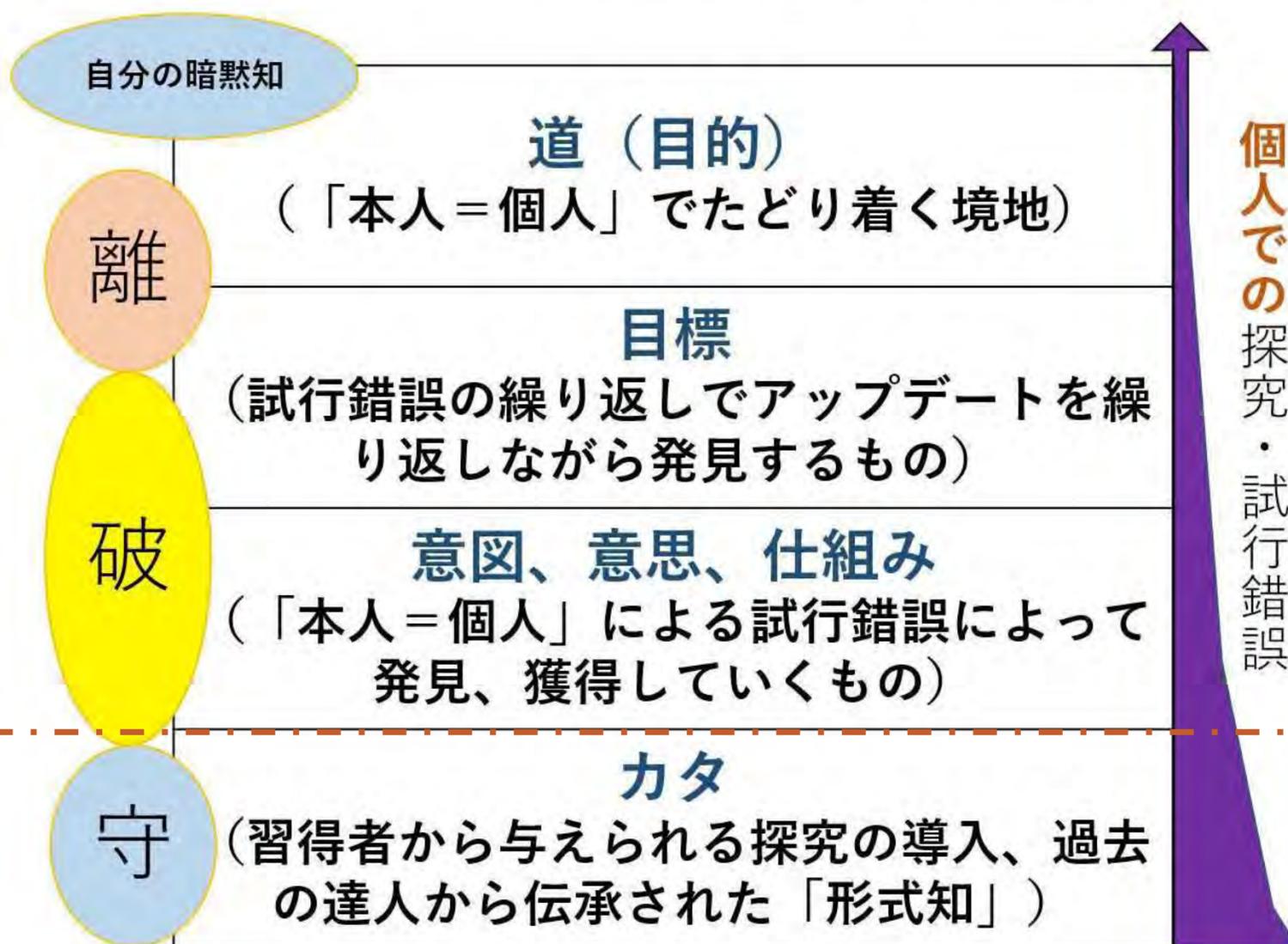
※ 「カタ」「形」と称して画一的にはめこむ
レセプションに限らず他にも長年変わらず受け継がれているものが多い。
現代ではその指導の弊害もみられる。

型・形を再現すること = 「基本」
型・形を再現すること = 練習における目的化
↓ ↓ ↓
日本における「武道」の修練でよく見られる
「型」のアプローチに近い。

【伝統芸道・武道の学習過程とバレーボール指導】 6)



【伝統芸道・武道の学習過程】 → 【「道」の構造】



【見失ってきたもの】

- ・バレーボールというゲームの全体像や本質
- ・チームとしての探究や試行錯誤
- ・選手個人内の「守破離」（探究・試行錯誤）
- ・自チームや相手チームの把握に基づく探究
- ・発展の多様性、多様性の中から集約される知見など

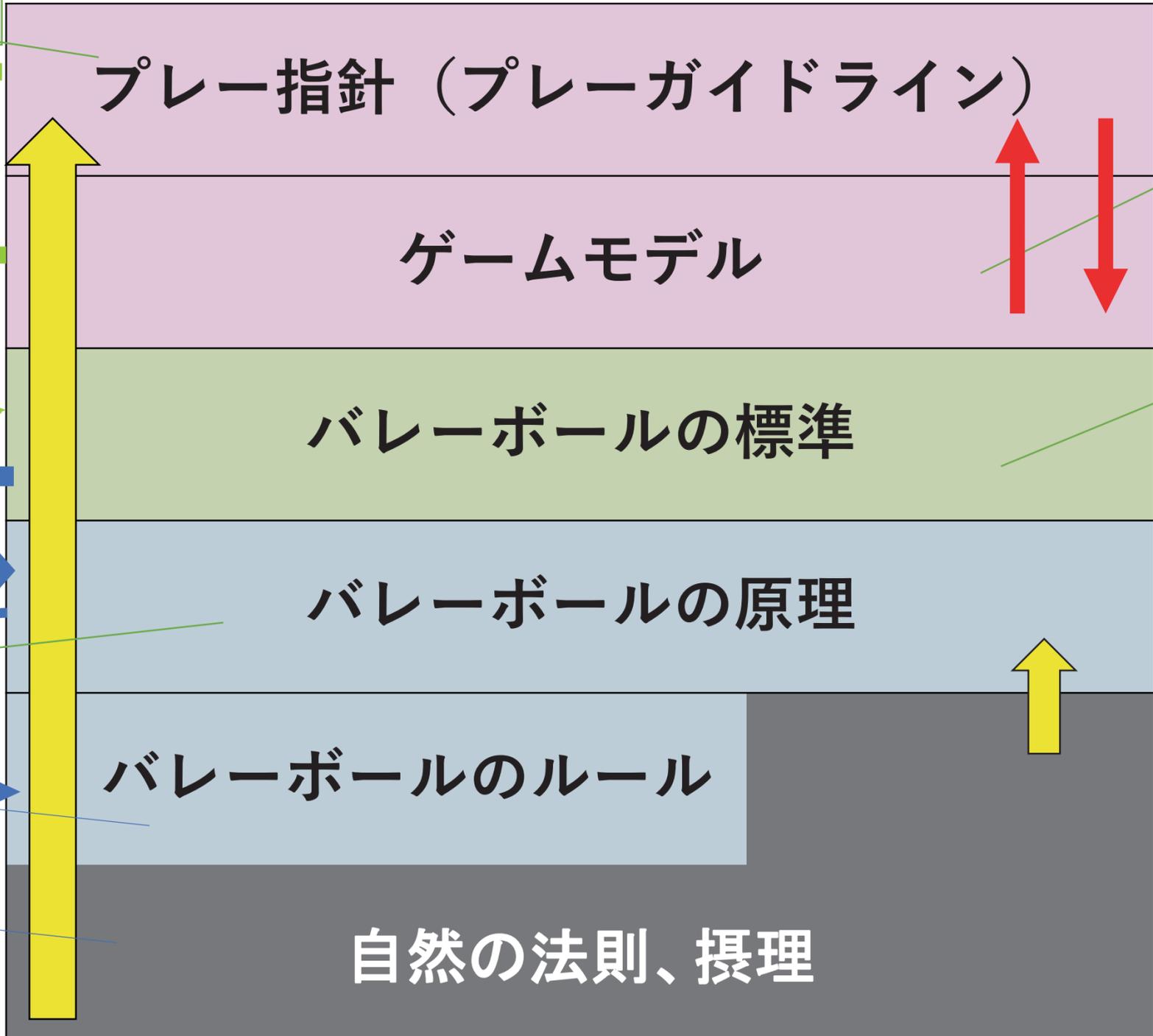
日本における
従来のバレーボールの
営み・指導法の傾向

- ・カタ
- ・カタチ
- ・忠実に

意思決定に必要な
個人の判断基準

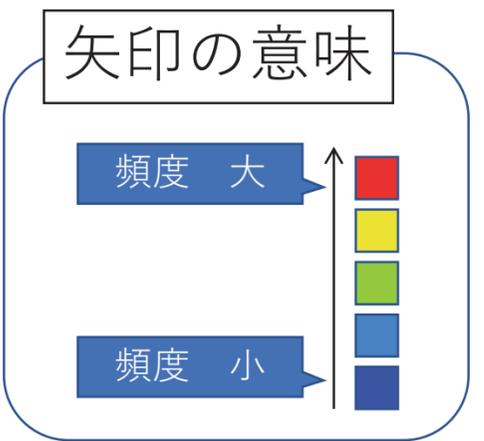
【バレーボールの階層構造】

ゲーム遂行の
目標,意図,意志
チームの基準



現段階で最低限
満たしてほしい
スキルや知識
(最低限の基準)

個人やチーム
によらない
普遍的なもの



CHAPTER 3

考察 (2)

～ 「ゲームモデル」と 「プレー指針」 7)

▼旧型のバレーボール

〔プレー指針〕

- ・ 正面でレセプション
- ・ ニアネットのAパス
- ・ 低め速い返球
- ・ マンマークのブロック
- ・ フロントの時間差攻撃

〔ゲームモデル〕

- ・ スピード
- ・ 正確さ、精度
- ・ コンビバレー
- ・ 相手のマークをはずす

◎現代のバレーボール

〔プレー指針〕

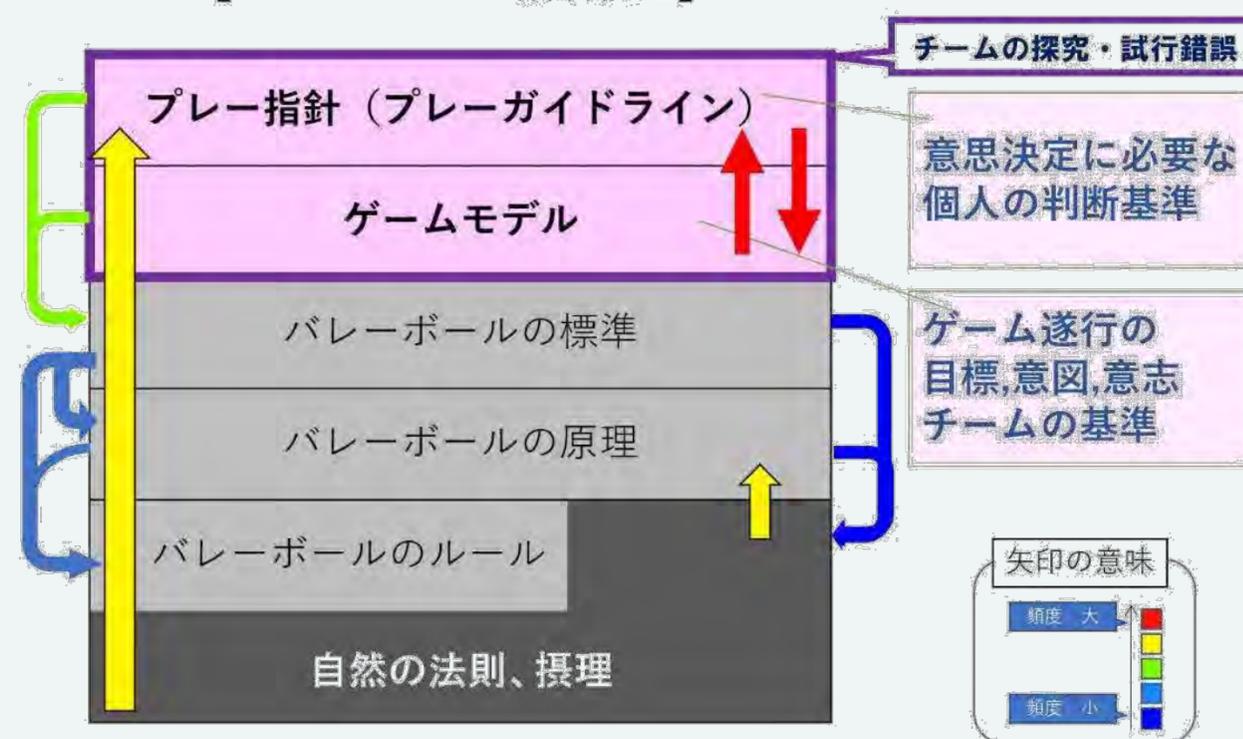
- ・ 面を合わせるレセプション
- ・ 高くゆったり返球
- ・ アタックライン付近のAパス
- ・ ゾーン/リードブロック
- ・ シンクロ攻撃

〔ゲームモデル〕

- ・ 数的優位
- ・ 質的優位
- ・ 位置的優位
- ・ トータルディフェンス

ルールの変更、映像やデータなどの情報技術、
トレーニング理論、専門スタッフの参画と分業 など

【バレーボールの階層構造】

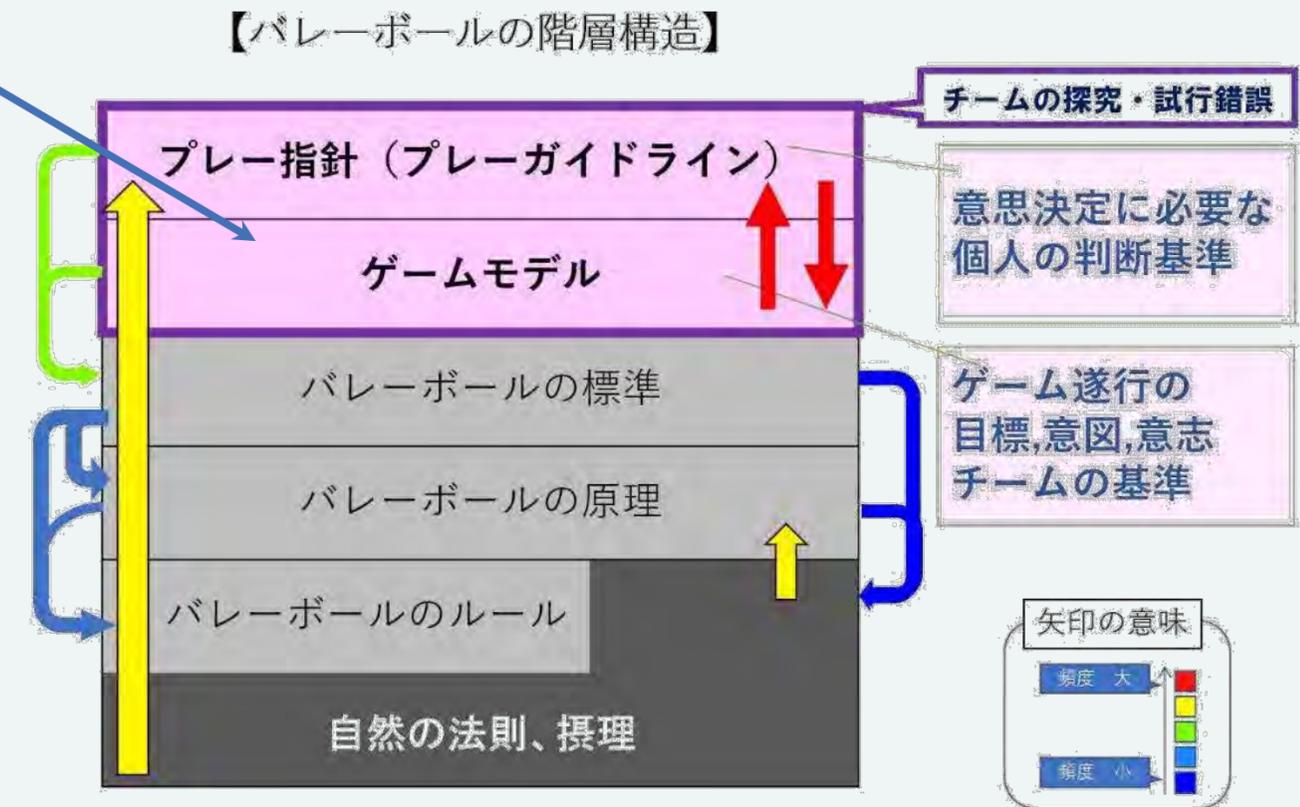


〔チームのアップデート〕
チーム (集団) の探究
全員による試行錯誤・協働・対話の機能
合意形成

〔階層化構造で見えてくるバレーボール競技〕

- ・ **ルールや環境要因で変わっていくもの**
⇒ 常に検討が求められる
- ・ **普遍的な原理や節理**
⇒ 順守しなければならないことがあることが明らかになる。

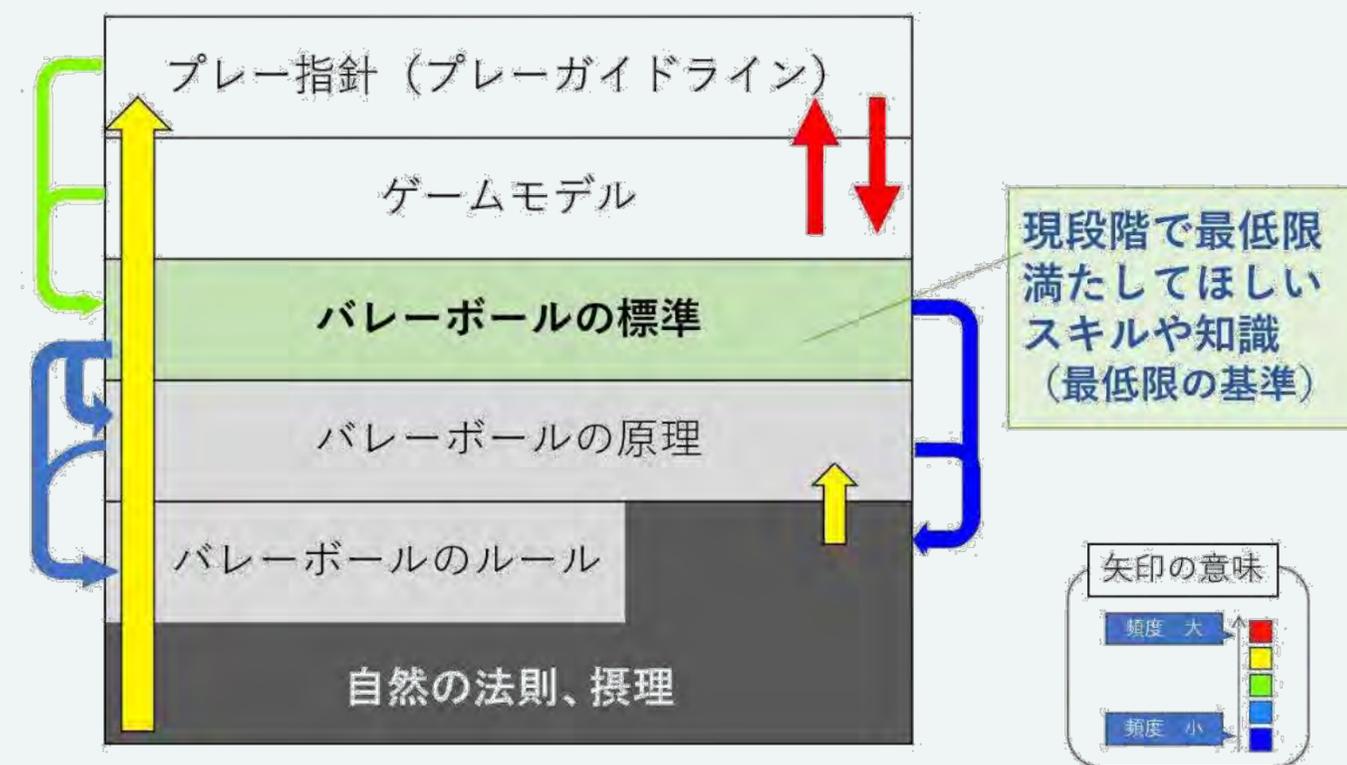
世界においては、
過去に、少なからず日本で一般的に行われてきた指導が普及していた 時代があった。
⇒ (世界では) そこからアップデートを積み重ねて現在のプレーや指導法に至る。



〔日本のバレーボールにおける「基礎基本」の課題〕

- ゲームモデルやプレー指針とリンクしていない
- 一貫性がない
(カテゴリや指導者によってバラバラ)
- 画一的な指導で個別性が保障されていない
- 個別スキルの「形づくり」「型はめ」に終始
- 動作原理・自然法則がおさえられていない

【バレーボールの階層構造】



アンダーカテゴリで言われる「基礎基本」が、昔のものと変わっていないものも多い。

【1972年ミュンヘン五輪後の主なルール変更】 8)

(日本男子バレー五輪金メダル後のルール変更)

※レセプション指導の変化に影響が大きいと考えられるものを抜粋

1977年 **ブロック後、3回のボールコンタクトが可**

1984年 **サーブ&ブロックの禁止**

1984 ロサンゼルス五輪
1988 ソウル五輪
1992 バルセロナ五輪

1995年 **ボールが身体の中の部分に当たっても可**

サービスゾーンが3M→9Mに変更

1996 アトランタ五輪

1998年 **すべてのセットにラリーポイント制の採用**

リベロ制の採用

1999年 **ネットイン・サーブの許容**

2000 シドニー五輪

・ロングサーブ
(フロート) への
対応

→ 身体の正面で
レセプション



・ジャンプサーブ
の主流化

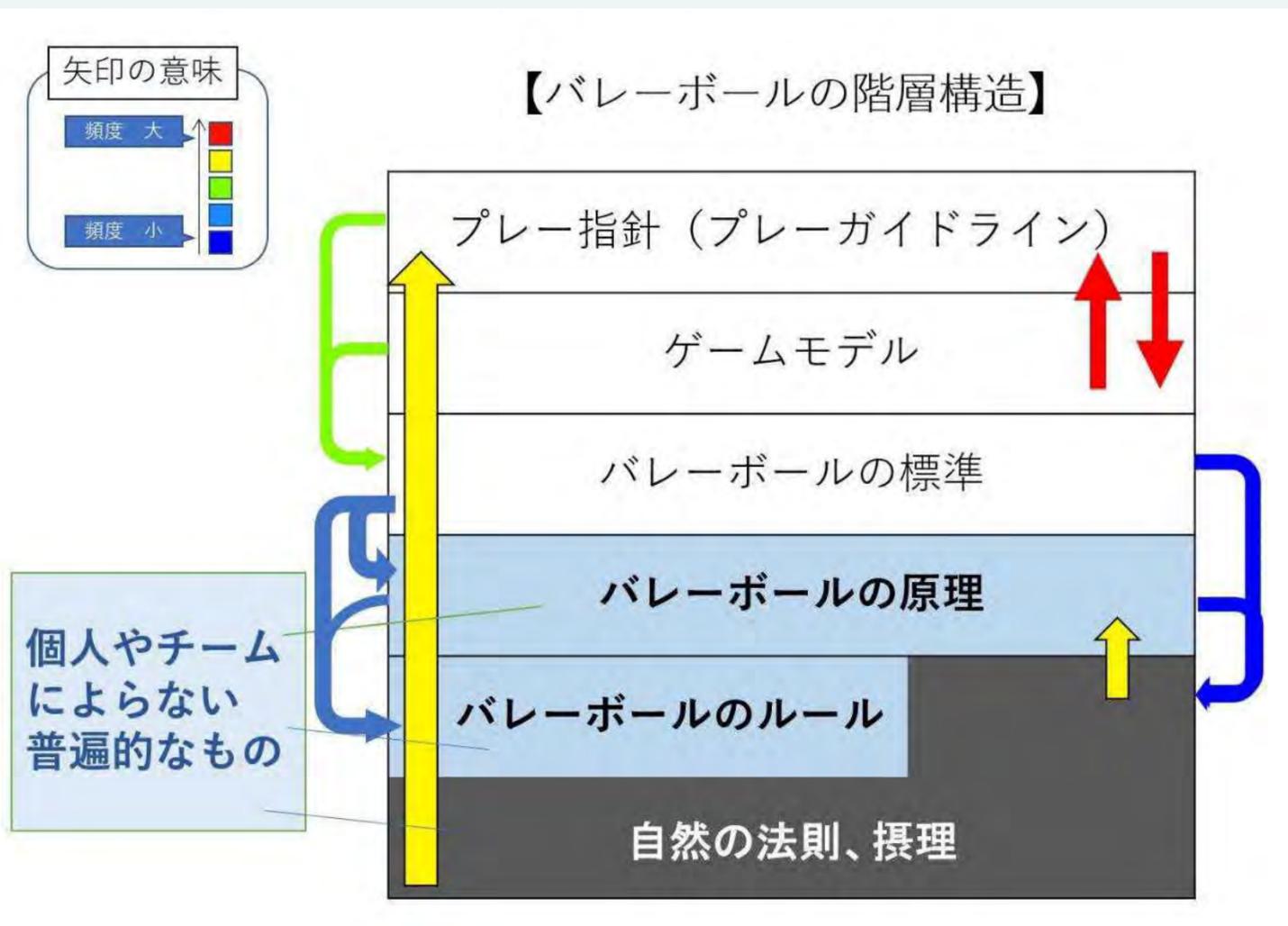
→ 移動の動きを
最小にして面
を合わせる

CHAPTER 3

考察 (3)

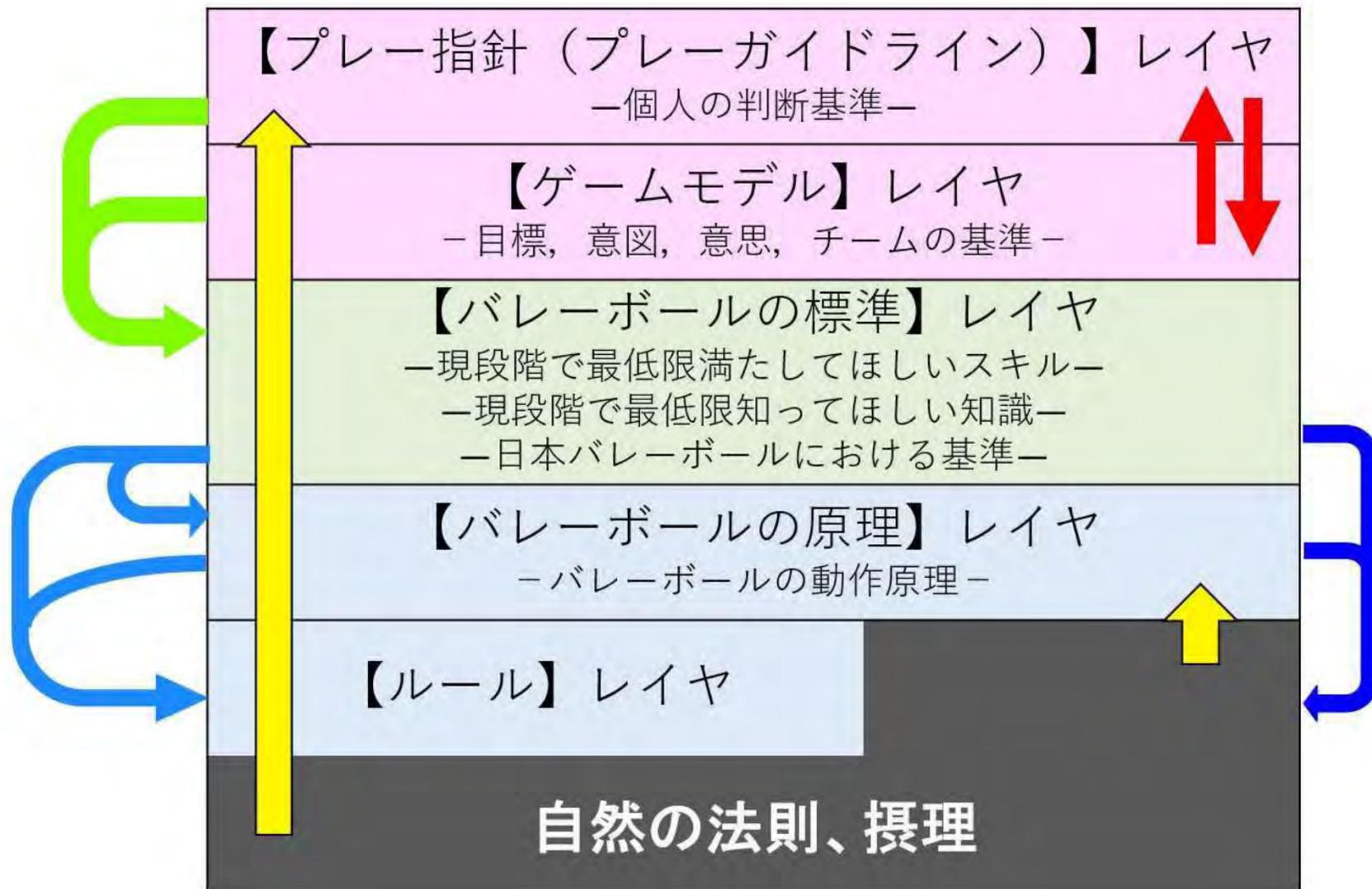
～バレーボールにおける「基礎基本」を考える

〔「基礎基本」を支える土台としてのルールや原理〕



- チーム内での3回以内のボールヒット
(※キャッチは反則)
- ネット上を介して相手コートへ返球
- 相手コートにボールを落とすことを目指したアタックによる攻防
- ラリーに勝つことで得る得点を争う

【バレーボールの構造（チームスポーツ/ボールゲーム）】



【伝統芸道・武道の学習過程】 → 【「道」の構造】



- ・ 個人とチームの探究・試行錯誤の複合
- ・ ゲームを機能させる
- ・ 階層構造の下位ほど拘束力をもつ
- ・ 階層構造の上位ほど多様性・可変性がある

- ・ 個人による探究・試行錯誤
- ・ 「守破離」のプロセス
- ・ 自分でたどりつく境地の獲得（暗黙知）

CONTENTS

CHAPTER1

背景

1. 日本男子バレーのアップデート
2. アンダーカテゴリ指導との乖離

CHAPTER2

目的と仮説

1. 階層化構造と一貫指導の実現
2. 仮説

CHAPTER3

考察

1. 階層化構造の必要性
2. プレー指針・ゲームモデル
3. 基礎基本を考える

CHAPTER4

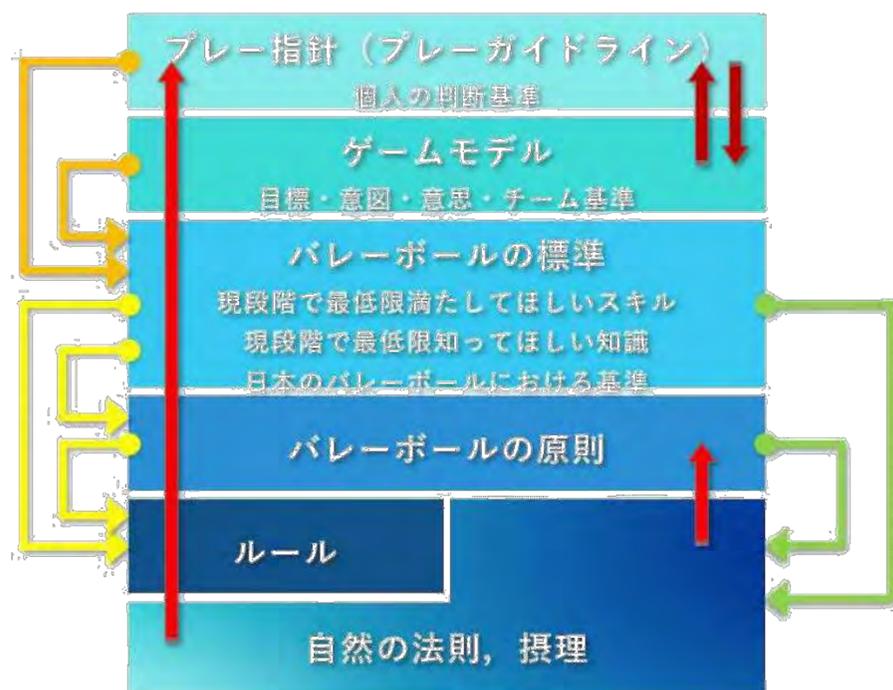
結論・まとめ

1. 階層化構造におけるポイント
2. 階層化構造によって期待される取組
- 3 おわりに

CHAPTER4

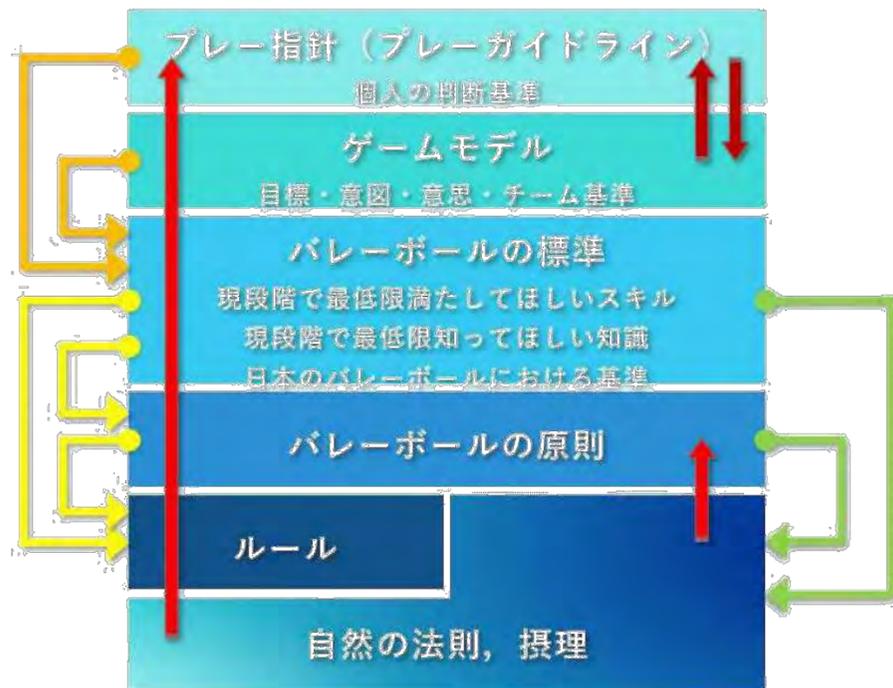
結論・まとめ ～バレーボール階層構造の提案を通して

バレーボールにおける階層構造は、バレーボールの**技術検討**、**戦術検討**、そして**一貫指導の実現**にとって**有益なもの**となる。



階層構造は、**選手やチームの試行錯誤**、**対話**、**探究**とそれにと
もなう**主体的な「守破離」**の機能を保障し、**個性や多様性の保障**
と**協働性を機能させる**。

階層構造に基づいた**各セクション**における**探究の実現**により、**絶え**
ずバレーボールのアップデートが可能となり、**合理的な指導法**が全
国で等しく提供され、**一貫指導の実現**に近づく



「階層構造」は、下の階層になるほど拘束力が強まる
(順守しなければならない)条件

上の階層になるほど、可変性や多様性が保障されるが、
下の階層が順守されていることが前提条件。

バレーボールは、この階層図をふまえた構造で選手個人
やチームとしてのプレー、ゲームが成り立つ。

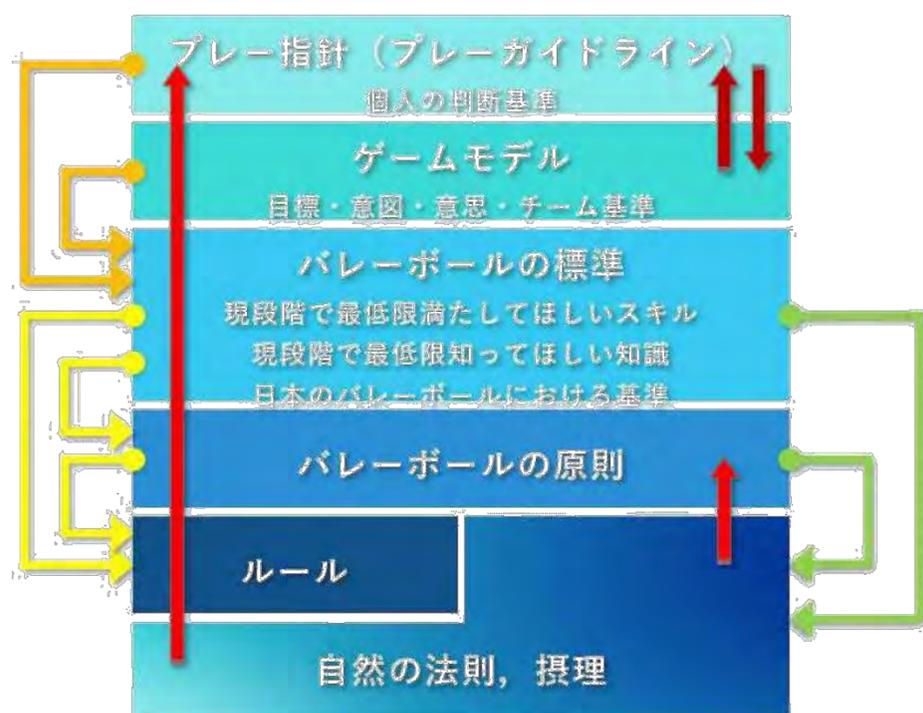
個人とチームの探究と試行錯誤で発展していく。

階層のどこかに欠陥がある場合、チームやゲームの成立
や発展に支障が生じてくる。

CHAPTER4

結論・まとめ

～バレーボール階層構造におけるポイント②



図中の矢印で示す「探究」・「試行錯誤」は保障・確保されなければならない。この矢印には常に「自チームの把握」「相手チームの把握」、つまり、階層構造に基づいてどんなバレーボールが行われているかを把握することが必須。

「ルールを守る」や「安全の確保」は、スポーツが存在するために最低限の条件である。

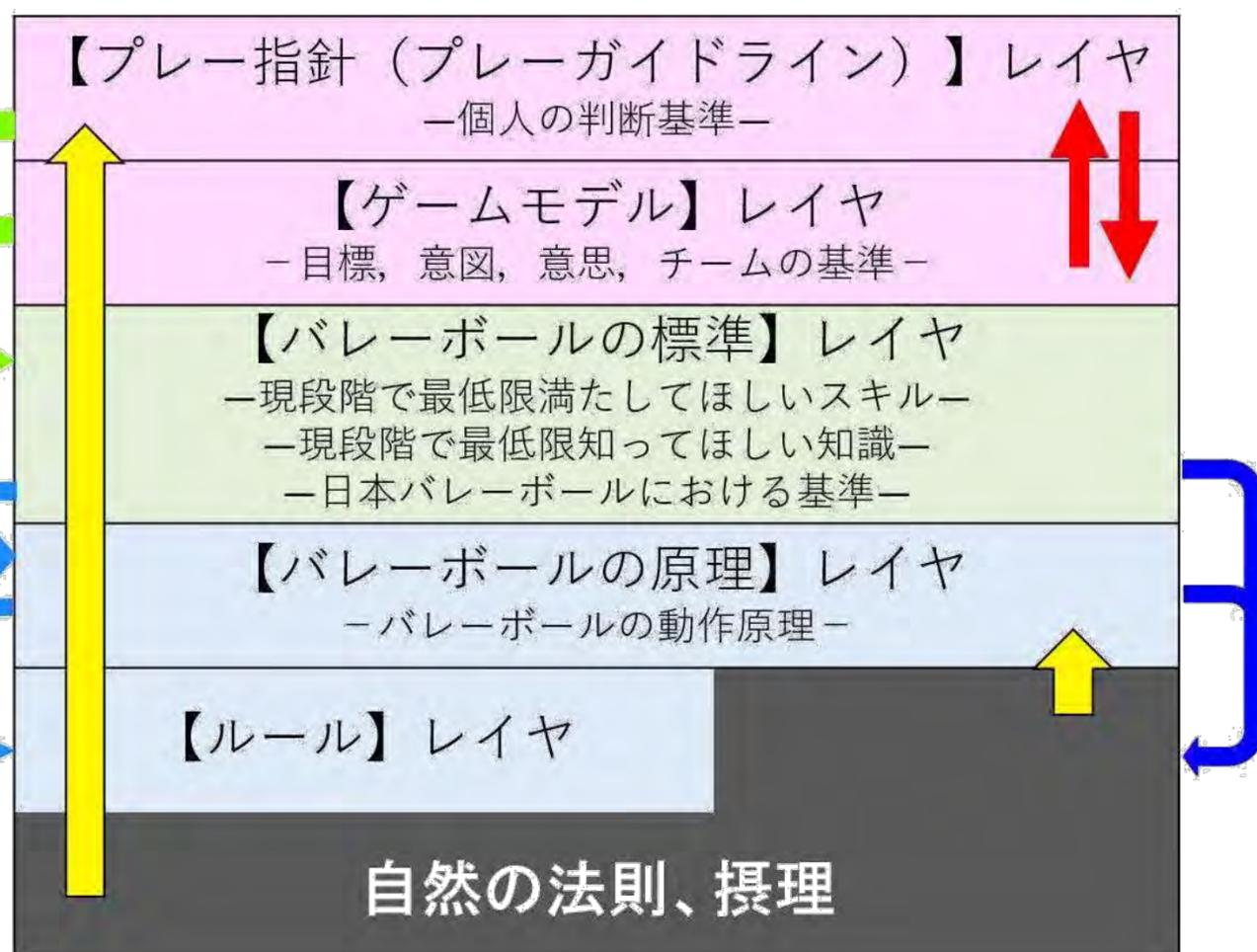
「標準」とされるものは、少なくとも、日本国内とか、カテゴリ内全体など広いスケールでシェアされなければならない。個人の理論や解釈で乱立するものではない。

CHAPTER4

結論・まとめ

～階層構造によって期待されること①

【検討・ディスカッション・探究・試行錯誤の主体と取組】



「ゲームモデル&プレー指針」

⇒〔各チーム、各プレイヤー〕 でなされる



「バレーボールの標準」

⇒〔日本バレーボール協会〕 でなされる



「バレーボールの原理・ルール」

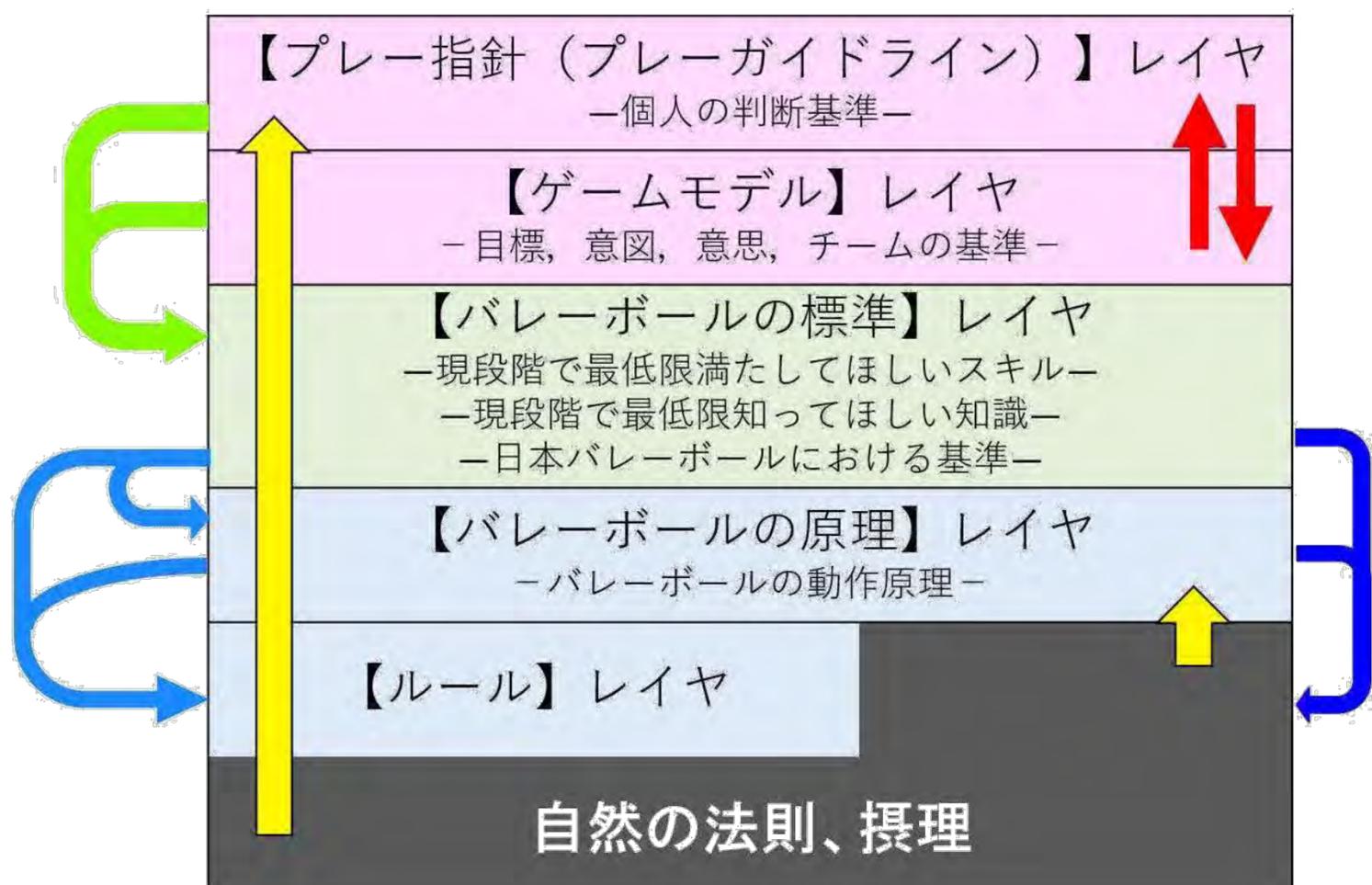
⇒〔バレーボール競技界全体〕 でなされる

CHAPTER4

結論・まとめ

～階層構造によって期待されること②

【バレーボールの階層構造によって整理されること】



「バレーボールの現状把握と分析」

⇒ゲームの構築を合理的に成立させる

「時代の変化に対応したアップデート」

⇒合理的な対応策や育成プランが機能

「バレーボール指導の迷走からの脱却」

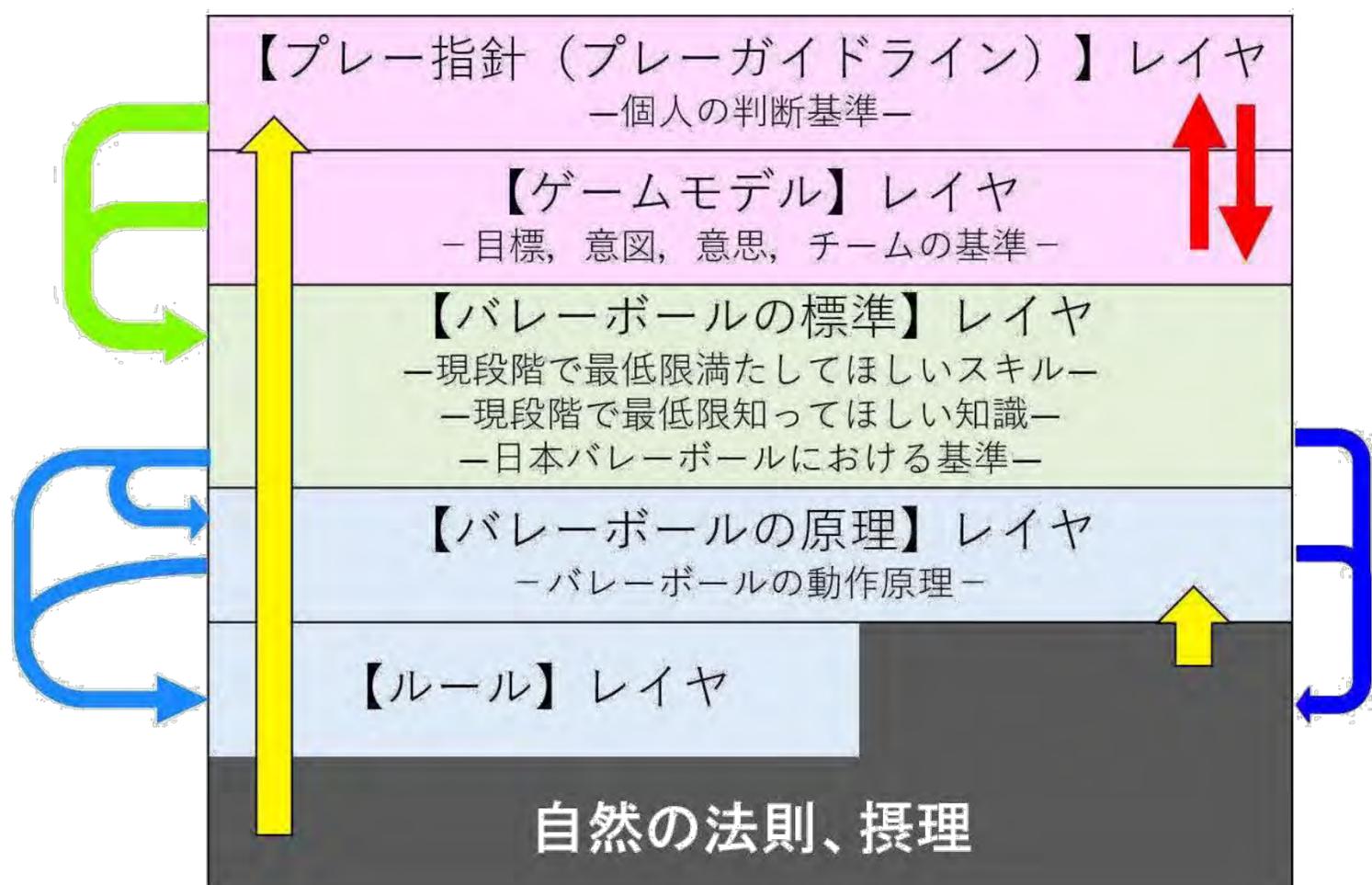
⇒基準の明確化と全体シェアと一貫指導

CHAPTER4

結論・まとめ

～階層構造によって期待されること③

【階層構造によって整理されるバレーボール指導】



「バレーボールの現状把握と分析」

⇒ゲームの構築を合理的に成立させる

「時代の変化に対応したアップデート」

⇒合理的な対応策や育成プランが機能

「バレーボール指導の迷走からの脱却」

⇒基準の明確化と全体シェアから一貫指導へ

CHAPTER4

結論・まとめ

～階層構造によって期待されること④

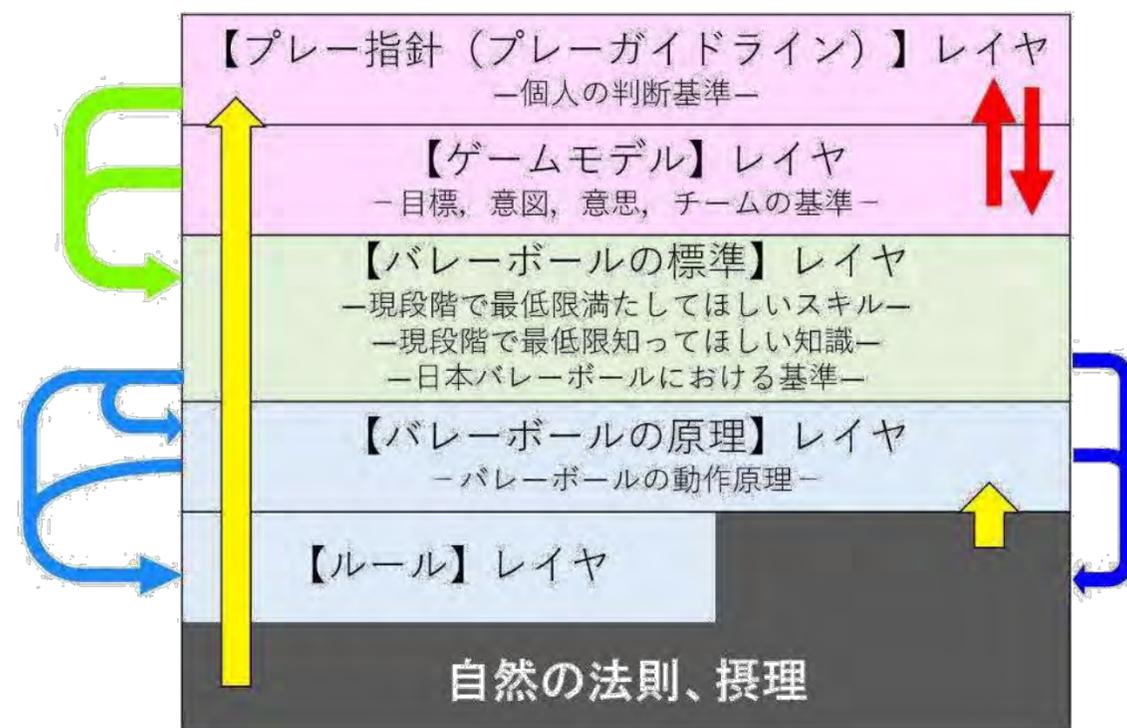
〔選手（個人）〕

- ・カタを入り口とした**試行錯誤**や**探究の機能**を確保する
- ・一人一人が獲得する個人スキルの「**暗黙知**」の**多様性**
- ・個人の主体性と状況を判断して動く力の保障

〔指導者・スタッフ〕

- ・選手との**対話、議論、探究、試行錯誤**を通じた**合意形成**
- ・階層構造に基づく**自チーム、対戦チームの把握**
- ・個人への**フィードバック**

ボールゲーム／チームスポーツとしてのバレーボール



- × 個人のみでの探究と試行錯誤である武道とはプロセスが違う
- × 武道的な暗黙知の獲得にも至っていない、探究と試行錯誤のなさ

〔チーム〕

- ・ゲームモデルやプレー指針の**探究、試行錯誤**
- ・ゲームモデル、プレー指針の多様性の余地の保障
- ・自チーム、相手チームに関する**合理的な現状把握**

〔組織（JVA）〕

- ・定期的・**合理的な技術検討**（組織としての探究）
- ・合理的な**標準の設定と普及**
- ・**ルール順守**の徹底
- ・「**一貫指導**」の構築

CHAPTER4

結論・まとめ ～おわりに（先人たちへの敬意と未来志向）



1960年代～1970年代、まさに日本のバレーボールは、間違いなく世界の頂点に立っていた。

そこには、**当時の選手・関係者による、並々ならぬ探究と試行錯誤、協働と対話を通して得られた成果や**

〔偉業と功績〕

知見は、日本のバレーボール界と世界のバレーボールの発展に大きな影響を与えた。



1980年代以降、日本のバレーボールは、世界に溝を空けられてきた。その間も日本のバレーボールとしての独自の試行錯誤はあった。しかしそれは、暗中模索・手探り的なものだったかもしれない。

その間グローバル化や高度情報化、ルール変更などで、バレーボール自体が大きく変わった。それらの

〔過去から学ぶ〕

変化に主体的に検証・対応できる仕組みや機能が確立されていなかったことに今気づかされた。



バレーボールを階層構造化し、それに基づいた考察と実践によって、日本のバレーボールの**どのカテゴリ**

でも個人・チーム双方向での探究や試行錯誤が機能していき、探究や試行錯誤の継続の中で、変化への

〔発展を願い〕

対応やアップデート、その時点での基礎基本とよばれるものが明らかになり、一貫指導の実現に近づく。

〔参考資料〕

- 1)中西美雁.“目標は銀メダル？初の外国人全日本監督は日本の男子バレーをこう変える”.web Sportiva Love Sports.2013-05-22.
https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/otherballgame/volleyball/2013/05/22/post_174/,(参照2022-02-23)
- 2)中西美雁.“【男子バレー】グラチャン最下位。いま全日本に何が起きているのか”.web Sportiva Love Sports.2013-11-25.
https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/otherballgame/volleyball/2013/11/25/post_234/11/25/post_234/,(参照2022-02-23)
- 3)田中夕子.“バレー界初の挑戦はあっけない幕切れ 埋まらなかった外国人監督と協会の溝”.Sportsnavi.2014-02-07.
https://sportiva.shueisha.co.jp/clm/otherballgame/volleyball/2013/05/22/post_174/,(参照2022-02-23)
- 4)米虫紀子.“史上初の外国人監督が1年で交代！男子バレー、これは可能性か混迷か。”.Sports Graphic NumberWeb.2014-02-14.
<https://number.bunshun.jp/articles/-/785655>,(参考2022-02.23)
- 5)平山連.“元バレー代表古賀幸一郎さん、NECの選手を指導「どんどん挑戦して」”.日刊スポーツ.2021-04-09
<https://www.nikkansports.com/sports/news/202104090001181.html>,(参考2022-02-23)
- 6)「わざ」から知る 生田久美子著 東京大学出版会 初版1987-9-25
- 7)谷釜 尋徳, 藤田 将弘, 芦名 悦生“複雑系的な思考からみたバスケットボールの練習における戦術 と技術との関連性について”
東洋大学学術情報リポジトリ スポーツ健康科学紀要 2013-03
- 8)「footballista」(フットボ リスタ) 2020年3月号 特集「日本サッカーが今、知るべき戦術的ピリオダイゼーションって何？」
- 9)「バレークロニクル バレーボール年代記」日本バレーボール学会編 日本文化出版